

限定二百部復刻

高杉・久坂と並ぶ、松陰門下三秀、吉田年麻呂（稔麿）  
地元氣鋭の研究者が丁寧な注釈や解説を加え  
満を持して放つ、待望の第一級貴重文献！

吉田年麻呂 史料

題字 吉田年麻呂自筆

一坂太郎・道迫真吾編



マツノ書店

賛は松陰・月の絵は松洞・無逸の東行を送る

## 1 日記

嘉永六年ほか

(前欠)

分へ罷出相済、御酒をも頂戴被仰付候。

但国司様固屋にて事。

一、嘉永七寅の正月十日、御数奇や方へ麻布御宝蔵天満宮様御出、御初穂を納捌土器にて御神酒頂戴御洗米をも被下、二之間にて茶碗にて御酒頂戴事。

一、同十一日、伊豆之沖へアメリカ墨利加合衆国より大船七艘参り候と申注進有之。

同十四日浦賀之沖え七艘着船仕、其より本もくのはなより順々と地方へより候。羽根田はなえセ壹艘参り候所、三月朔日しほ引てあさく相成候間跡へ引、神奈川本牧え着船仕候。已上八艘参り、見物行き申候。

一、同二月十九日より記六所本番として被差出候事。

一、同四月廿六日江戸出立、御到来方手子・旅籠弘方手子・御時計才領として被差下候事。

一、西条より追越、其より三田尻着、植木作右衛門様方にて中一日泊り、廿五日夜八ツ時頃より

三田尻出立、廿六日に萩え着。

七月より記六所本番として被差出。

泊り寄  
七月出勤。

#### 4 意見書草案等

##### (一)

##### 四国見分

一、三丹州米穀不出来、大抵升に付百四十文位之よし。

一、丹波福知山城下百姓一揆起り、上の産物会所をこわし、大騒動に相成申候。百姓願の通り御聞入に相成、家老市川何某其外逼塞、往々は切腹に相成可申、殿様は御国替に相成可申風評に御座候。委細は帰国万々可申上候。此事八月にて御座候。尤産物に付て悪政事有之候様子、八ヶ年程以前已に落書、

市川よにかわをつけて用心せよ人の怨うらみでふちが離はなる、

又午年の落書に、

上下の洗濯時せんたくが遅おそなりて上はよごる、下はやぶる、

右之咄百姓一揆之節参り候百姓同道委敷承り候。

一、因・伯は矢張米高く六合位之よし。百姓共甚困窮にて端々少々のもめは有之哉に承り候。

一、出雲は出来相応にて御座候。政事は相応に宜敷と見へて、銀壹匁札丁錢百四拾五文に通用仕候。石州は米代百六十文にて、安芸の在郷は壹石百三十目程、城下は余程高く下関は百九十文、今日承り候へは又々下け候て百

而君之遺金見在塩屋氏、々々々乃封送之君之父清内翁於長門萩、具告以其被托之故、翁亦不敢受、直還納於藩庁、々々深賞三人之清節、因復下其金於翁、以供祭祀焉、初君之托塩屋氏也、手題其封面備述所以不私儲之意、塩屋氏記念之、会今年丁丑十三周忌辰、因往慰訪翁於談、且乞而獲其封題故紙持帰袂背之以寓薦奠、乃囑余跋紙尾、余既感其旧誼、為叙其事由如斯、願以君平生之豪邁曠達今乃於区々数十金其謹防曲察如此、豈所謂有大志者能勤小物耶、余既傷君之非命、又幸其手沢之存、悲喜交至、遂慨然書此、時明治九年十月、靈山招魂祭期之前三日也。尋知国重正文記於京師鴨河西崖之寓居共一楼中。(印) (印)

おもひきや十とせあまりもなからへて

涙ながらに筆とらむとは

やじ 拝草

(以上四点、京都大学附属図書館蔵)

【解説】 元治元年四月、江戸行の藩命を受けた稔磨は將軍あての藩主嘆願書を携え、山口を發つ。五月、京都に立ち寄り滞留することになったため、稔磨は藩から受けた江戸行きの旅費三十両を旧知の商人塩屋兵助に預けた。その包上書きである(一)と、覚書きの(二)はいずれも稔磨自筆。結局、六月五日の池田屋事変で稔磨は命を落としたため、塩屋は預かっていた金三十両を萩の父吉田清内に送る。清内はこれを藩庁に届けたが、藩は祭祀料として清内に与えた。(三)はそのさいの藩からの文書。明治九年十月、その解題を国重正文(徳次郎。長州藩士、東京国学院長など)が書き、品川弥二郎(やじ)が歌を添えた(四)。(一)から(四)まで一幅の掛軸に収



## 『吉田年麻呂史料』の刊行を喜ぶ

京都大学名誉教授  
前京都学園大学学長

海原 徹

元治元年六月五日の池田屋事件で闘死したとき、吉田栄太郎はまだ弱冠二四歳の若さであった。維新の大業半ばで非命に倒れ、歴史の表舞台から早々に退場した大勢の村塾生の中でも、おそらく一、二を争う短い生涯ではなかっただろうか。あまりに早く姿を消してしまったためか、村塾時代はともかく、その後の彼の履歴、なかんずく志士のキャリアは、その華やかな事績のわりには、さほど詳しく知られていない。

安政三年三月から五年一二月まで、二年一〇カ月余存続した村塾に学んだ九二名の塾生たちのうち、栄太郎は比較的早く村塾の門を叩いた一人であり、まだ松陰先生が杉家の幽室（四畳半）で教えていた安政三年一月二五日、すでに寄宿生であった増野徳民に伴われて来た。天保一二年生まれであるから、数え年一六歳のときである。村塾に一〇名ほどいた足軽・中間の軽卒身分の中では一番早い来塾であり、やがて姿を見せる品川弥二郎や伊藤利助（博文）らが、彼の紹介で来たことは、おそらく間違いない。

野山再獄後は、親族一同に強く迫られ、松陰先生はもちろん、村塾との関係もすべて絶つことを余儀なくされ、しばらく消息不明となるが、栄太郎の履歴の中で一番分かりにくい、つまり謎に満ちているのは、兵庫出張中の万延元年一〇月、脱藩して江戸へ出た一件である。出自を隠すためか、松里勇と名前を変え、しばらく諸方に潜伏しているが、この間の周旋に桂小五郎や久坂玄瑞らが関わったふしがあり、松門の同志たちによって仕組まれた半ば公然たる脱藩であったらしい。旗本奉公を画策、伝手を辿

って旗本妻木田宮の家来となり、用人格まで出世している。幕府の奥右筆、やがて目付に任じた妻木の下で、幕閣の情報収集をめざしたものであるが、文久二年五月、「將軍入朝攘夷の令旨を伝へ」る勅使下向を知ると、突然、妻木家を辞して萩城下に戻った。脱藩行の罪は一切問われず、再出仕を許されており、当局側にも、この間の事情は了解済みであったようだ。

文久三年四月、馬関で久坂玄瑞らを中心に結成された光明寺党のメンバーであり、六月七日、これを母体に発足した高杉晋作の奇兵隊にいち早く馳せ参じた。七月五日、吉田松陰に従学し、尊王攘夷の正義に尽くした功績で士雇に挙げられ、藩命で稔磨（年磨、年麻呂、年丸、としまるとも書く）と称したのは、このときである。たまたま大組士に同姓同名の人物がいたための処置であり、改名そのものに、とくに深い意味はない。

この後、幕府軍艦朝陽丸の抑留事件や奉勅攘夷、馬関戦争の経過説明の外交交渉に従事し、また早くから被差別部落民の登用を建言、自らは屠勇取立方として、やがて四境戦争で活躍する維新団や一新組など、いわゆる部落民隊登場の先駆けとなった。まだ二〇代に入ったばかりの若輩にもかかわらず、その才知や大胆な行動力は、村塾出身者の中でも抜群であり、早くから藩内外でその名を知られた。「松門四天王」の一人として、高杉晋作、久坂玄瑞、入江九一らと並び称されるのも、決して理由なしとしない。

新撰組と斬り結んで死んだ村塾の有名人のわりには、吉田栄太郎をメイン・テーマにした研究論文や著書はきわめて珍しく、一本にまとめられた伝記的取り組みとしては、戦前、昭和一三年に山口県教育会から刊行された来栖守衛『松陰先生と吉田稔磨』が、おそらく唯一のものである。吉田栄太郎一筋に長年研鑽を重ねてきた著者来栖が、満を持して世に問うた力作であり、膨大な時間と労力をかけて収集した史料を随所にちりばめ、しかも全編、達意の文章は、大いに説得力があり、読む者を一々首肯させる。今から七三年前に書かれた遙か昔の古い本とはどうてい思えない、なかなか読み応えのある好著である。

とくに巻末の「吉田家保存の文書」は、栄太郎が父母や友人知己、先生などに出した手紙やその返

書 あるいは藩庁宛の上書や建言、その他関係書類を一括、編年史的に収録しており、またこれに続く、「吉田家以外に保存の文書」は、毛利公爵家や諸家の所蔵する関係文書を収録している。本文に引用された多くの史料と併せ、いずれも第一級の貴重な文献であり、単なる評伝でなく、史料集としても大いに利用価値がある。

とはいえ、本書にも不足した部分、われわれ読者から見ても不満な箇所がないわけではない。それは、掲載された史料のあちこちで、「全文省略」「之ヲ略スル」「外略ス」などとしながら、タイトルや大意のみで全文の掲載を省略、割愛したものが少なからずあることである。研究者的な観点からすれば、まさにその箇所を知りたい、もう少し続きを読んでみたい部分が、著者来栖の判断のみで随所にカットされており、その辺は以前から大いに気になっていた。

今回、マツノ書店から刊行される『吉田年麻呂史料』は、来栖本の出発点となつたいわゆる「吉田家保存文書」の原本を探し出し、かつて省略、割愛された部分を可能なかぎり元に戻し、それらの一つひとつに丁寧な注釈や解説を加えたものである。しかも、旧書にはなく、その後、新しく発掘、収集された栄太郎関係の未見の史料が多数プラスアルファされており、研究者はむろん、一般の歴史愛好家をも対象にした本格的な書物となっている。

なお、「史料」の編者となつた一坂太郎、道迫真吾の両氏は、萩博物館勤務の新進気鋭の研究者であり、吉田松陰や松下村塾についてもすでに多くの業績を世に問うてこられた。その意味で、史料の収集や編纂の作業、またこれを正確に読み込み、詳しく解説する上で、両氏にまさる適任者はなく、本書の値打ちを高めるのに、大いに役立つている。

今回の「史料」の登場が、これまで必ずしも正面から取り上げられることのなかった吉田栄太郎の人と為りにさまざまな側面から改めてスポット・ライトを当て、新しい研究の出発点となることは、おそらく間違いない。刊行に期待するところ大である。

周知のとおり、従来吉田稔麿に関する基本史料として利用されてきたのは来栖守衛『松陰先生と吉田稔麿』である。ただし同書には大きな欠点があった。なぜかといえば、同書が刊行された昭和十三年当時の社会的風潮と、著者個人の主観とが影響して、史料中に伏せ字が使用されたり、史料の大部分が省略されたりしているからだ。

そこで本書編集にあたっては、吉田家旧蔵で現在は萩本陣所蔵(萩博物館寄託)となつている稔麿関連史料の原典にあつて正確を期する一方、研究者以外の一般利用者の便も考慮して可能な限り読みやすいものとなるよう心がけた。

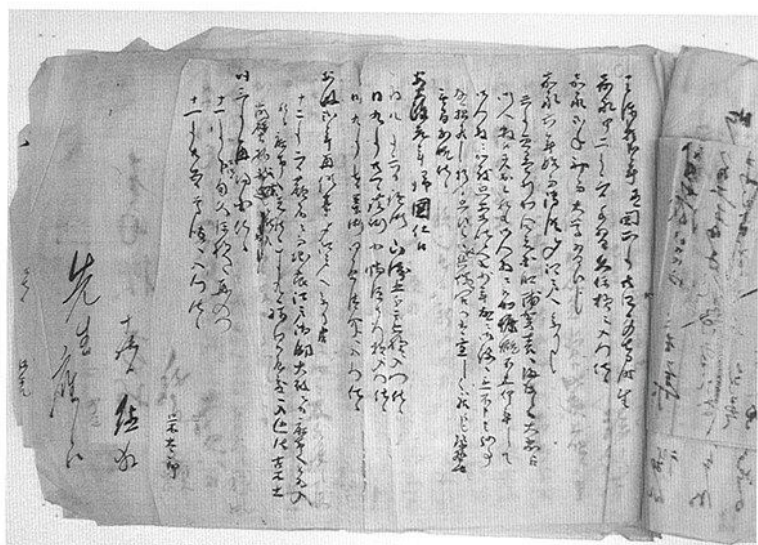
その理由は、私が博物館という世界に身を置いているからにはほかならない。常日頃より、研究者よりもむしろ一般利用者から、本書の刊行を待ち望む声が届いている。ぜひ実際手にとつてみて、使いやすさの面で他の史料集との違いを感じとつていただきたい。

## 略目次

■往復文書(嘉永六年より年代順に列記)吉田松陰、大野信吉、富永有隣、高杉晋作、斎藤栄蔵、許道、櫻井幸三郎、中谷正亮、母イク、父清内、作間貞、岡部繁之助、松浦松洞、増野徳民、来島又衛門、岡元太郎、桂小五郎、久坂玄瑞、品川弥二郎、吉田松陰・静斎、里村文

左衛門、里村スミ、岡本三右衛門、伊藤俊輔、柴田東五郎、平井政次郎、寺島忠三郎、小幡彦七、妻木田宮(向休)、平野清介、中村文右衛門、保里某など計121通。  
■述 作 日記、両秀録、意見書草案、東風不競密話草案、祖母の三年祭文など8篇。  
■履歴史料 吉田氏譜、吉田稔麿年譜、吉田稔麿存生并死期之伝記写など計8点。

■関係史料 吉田松陰日記、同書簡(40通以上)、同折煙管記、久保松太郎書翰、久坂玄瑞書翰、佐世八十郎書翰、伊藤俊輔書翰、入江杉蔵書翰、白石正一郎書翰、御盾組血盟書、益田弾正書翰、乃美織江手記、京都における吉田松陰慰霊祭祀事、馬関攘夷従軍筆記、奇兵隊日記など計124点。  
■影印 遺墨を写真で紹介(48頁)  
■引用および参考文献一覧



この史料集編纂の作業が終わりに近づいたころ、松陰の生家である杉家の史料(萩博物館蔵)未整理分から、吉田栄太郎(稔麿)の履歴書が出て来た。半紙一枚に細かい文字で書かれている「新史料」だ。まず、一行目が「天保拾貳年丑閏正月廿四日七ツ時生」となっている。年月日はともかく、生まれた時刻まで書いてあるのが面白い。十三歳の嘉永六年(二八五三)には藩主参勤に従い、初めて江戸へ赴くのだが、六月にはアメリカのペリー来航に遭遇する。そのさい、長州藩は幕府より大森海岸の警備を任されたが、栄太郎は「慷慨」のあまり、「御人数に加えて欲しい」と願ひ出る。しかし「少年故に御役に立たず」との理由で、却下されたという。外圧に敏感に反応した様子がうかがえる。

つづいて萩で、誰について文武の修行に励んだかが列記され、最後に「安政三年」十一月廿五日、尊館へ入門つかまつり候、「栄太郎」とある。「尊館」とは、松陰が主宰する松下村塾(まだ、この名称は使つていなかった)のこと。つまりこれは、松陰に入門にさいし栄太郎が提出した、自筆履歴書なのだ。他の塾生たちもみな、このような履歴書を書かされたのかは知らないが、当時の雰囲気や伝わる貴重な史料と言えよう。もちろんこの履歴書は翻刻し、影印版と共に収めてある。

■体 裁 A5判上製箱入500頁

■定 価 一万八千円(税込・千別)

■予約特価 一万五千元(税・千共)

■特価締切 24年1月20日(厳守)

■発売開始 24年3月上旬

限定三百部 (番号入)

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

●申し込みハガキにある三点セット特価をご利用下さい。

山口県周南市銀座2-13

☎0834②295

マツノ書店

URL <http://www.matsuno.com>